

習近平と馬英九—歴史的会談が意味するもの

中国の国家主席、習近平と台湾総統、馬英九がシンガポールで中台首脳会談を開いた。1949年に中華人民共和国が成立し、蒋介石の中華民国が台湾に逃げ込んで以来、台湾海峡を挟んで対峙してきた兩岸トップ初めての会談だ。ここ数年は海峡の波は鎮まり、平和な海となっただけだが、一時は砲火を交え、ミサイルも飛んだこともあっただけに中台首脳会談はまさに歴史的であり、台湾海峡の平和を如実に象徴している。だが、その演出には隠された意図があり、この平和が続くかどうかは予断できない。（ジャーナリスト・迫田勝敏）

馬総統の悲願成就新たなあだ名は「軽佻」

会談は台湾メディアのスcoopで明らかになり、予定を早めて台湾総統府が夜遅くに異例の正式発表をした。その翌日、11月5日に馬英九が総督府で緊急記者会見し、改めて総統の口から会談についての詳細な説明をした。質問は実に51問。時間を延長して馬英九は次々に答えていた。

ここ数年、何度も総統府の会見に出ているが、こんなに上機嫌な馬英九を見たのは初めてだ。質問には短く即答。いつもなら正面から答えず、はぐらかしの返答をするが、この日は時にあまり面白くもない冗談も交え、答えていた。「今回は周美青夫人をなぜ連れて行かないのか？」という質問に「私が連れて行かないのではない、彼女が行かないと言うのだ」とおどけて答えるといった調子。歴史的会談実現で気分はハイになっていたのだろう。

中台首脳会談を台湾では「馬習会」と名付けている。馬英九に言わせると、2年前から提起していた。2013年のインドネシアでのアジア太平洋経済協力会議（APEC）の場でも「会いたい」とのメッセージを伝え、さらに昨年在北京でのAPECでもラブコールしていた。APECの非公式首脳会議に台湾も参加しているが、中国の反対で総統など政治家は不可。いつも経済閣僚などが出ており、最近では経済閣僚が長く、副総統もした蕭萬長が代理で出ている。

その場に総統が出て、習近平と個別会談したうえ、非公式首脳会議にも出れば、台湾の国際的地位は一段上がる。台湾海峡の平和を確立した一方の旗頭として歴史にその名を刻むことになり、史上最低の支持率から「9%総統」という不名誉なニックネームを付けられた馬英九としては汚名返上になる。台湾には「馬習会を実現し、台湾海峡の平和を世界的にアピールすれば、ノーベル平和賞ものだ」という声さえあった。それだけに習近平と会うことは馬英九にとっては悲願と言ってもよかった。

その馬習会が、APECの場ではなかったが、シンガポールで実現するのは馬英九の悲願成就ともいえるが、会談で台湾にとってのプラスはゼロに近い。浮き浮きして台湾総統の身分を忘れたという酷評もあり、「敗者」と伝えた外国メディアもあった。それはそうだ。その一例。「台湾に向けたミサイルは野党の兩岸関係批判の口実にされる」との言い方。これで台湾のリーダーなのかと言いたくなる。しかも「台湾に向けたものではない」と習近平に一蹴されて、反論もなく、お終り。一応、聞いてみたというだけでしかない。

習近平は晩餐会では「乾杯！」の際、あまり呑めないからと茅苔酒に口を付けるだけ。そのひと言で習近平の随行者はみな習近平同様に口を付けるだけ。宴会が終わる時によ

やく一杯を飲み干したが、馬英九は何杯か杯を空け、すっかりほろ酔い気分。宴会が終わってボディガードに支えられる始末。台湾メディアは「軽佻」と新たなニックネームを送った。

「一中」の首枷が狙い

もともと馬習会は馬英九が言う通り、馬側から働きかけていたが、習近平は台湾を国家として扱うようなことは絶対に避けたい。そのためもあって APEC の場でという馬英九のアプローチは婉曲に拒否していた。それが急に実現したのは、馬英九は「機が熟したから」と言ったが、実は習近平からの誘いだったからで、馬英九にとっても予期せぬ出来事だったのだ。

中国と台湾の兩岸関係政府機関である国務院台湾事務辦公室主任の張志軍と大陸委員会主任委員の夏立言が10月中旬、広州で会談。事務協議を終えて夏立言が台湾に戻る前に張志軍が珠江の船遊びに誘った。珠江を少し下れば今は人民解放軍の施設となっている黄埔軍官学校跡がある。設立当初は第一次国共合作時代で蒋介石校長の下、周恩来も葉剣英もいた。張志軍がそんな故事を話したかは不明だが、その船上で夏立言に馬習会を持ちかけた。

夏立言はかねて馬英九から馬習会実現の指令を受けていたから、すぐに飛びつき「マニラの APEC でどうか」と応じたが、「いや、国際的な場はよくない」と張志軍。そこで夏立言は1993年に初めての兩岸実務者会談が行われたシンガポールを提案した。シンガポールは親中国でもある。夏立言が台湾に戻った翌日には張志軍から「OK」の返事。それも APEC よりも前の7日を指定してきた。夏立言も報告を受けた馬英九も飛び上がって喜んだだろう。

習近平が会談を急いだ大きな理由は中国の国際イメージの問題だろう。南シナ海の人工島の問題などで中国はいまや世界の悪役になりつつある。米国は中国けん制のため南シナ海にイージス艦を派遣し、日本などアジアの多くの国が支持している。しかも G20、APEC、東アジア・サミットなど国際会議が目白押しだった。このままでは中国批判の集中砲火も考えられる。そこで先手を打っての馬習会開催。初の中台首脳会談は台湾海峡の平和を象徴するもので、中国の平和姿勢を国際的に印象付けることができる。

もちろん選挙も考慮しただろう。だがそれは国民党支援のためではない。中国はむしろ総統選、立法委員選での国民党の敗北、つまり政権交代を覚悟している。習近平は福建省に10数年いたこともあり、台湾のことをよく知っている。馬習会後の夕食会では馬英九が持参した金門高粱酒を自慢げに差し出すと、習近平は、金門高粱酒は生産量が増え、原料の高粱は今では中国から入れているということまで知っていたという。去年の太陽花(ヒマワリ)学生運動が台湾社会に与えた影響も馬英九よりも正確に認識しており、九合一地方選挙の国民党の敗因も馬英九よりも正しく分析しているはずだ。

その習近平は政権交代を見越して、馬習会では次期政権に「首枷」を掛けようとしたのだろう。これこそが馬習会の一番の目的だ。その首枷とは「一つの中国」、つまり台湾独立は絶対に許さないということだ。会談で大きなテーマとなったのは、一つの中国を謳った「92共識」だった。馬英九は「一中各表」、つまりその「一つの中国」とは何を指すかはそれぞれが解釈するというので、「中国とは中華民国だ」と主張。記者会見で馬英

九は「一中各表を言った時、習近平は不快そうな顔はしてなかった」と、相手も黙認しているかのような返答をした。

だが、習近平は「一中」とだけ言い、「各表」は言わなかった。つまり馬英九が主張する中華民国は認めていないのだ。結局、馬習会では一つの中国を確認しただけに終わった。実際、多くの外国メディアは「一つの中国を確認」と伝えた。習近平の目的はまさにそこにある。それで大成功。来年、誕生するはずの民進党政権も世界が伝えたこの「中台首脳合意」をまったく無視するわけにはいかない。

87%が「私は台湾人」

歴史的な馬習会で中台トップは「一つの中国」で合意した。合意そのものは重いものだが、馬習会ではなんの合意文書もないし、共同声明発表もなく、会談後の記者会見もそれぞれ別個に行った。ということは、合意には国際法的にはなんの拘束力もない。それでも次期政権には心理的な圧力になる。習近平の狙いは、台湾をあくまでも統一の枠組みの中に収めておくことが目的なのだからそれでいい。

1949年に中華人民共和国が誕生して以来、66年。中国と台湾の関係は大きく変わってきた。台湾側からみれば、金門島で砲火を交え、反攻大陸を唱えた蒋介石時代、戒嚴令を解除し、大陸里帰りを認めた蔣経国時代、そして一方的に内戦状態終了を宣言した李登輝時代、続く陳水扁時代は政治的には波風あったが、経済交流は大きく進んだ。そして馬英九時代は中台間で直接、通商、通航、通郵（郵便）する三通の実現で人、物、金の往来は大幅に拡大し、中台関係は急速に緊密化した。

この間、中国は台湾統一の看板を決して下ろしはしなかった。投資誘致で台湾企業に優遇策を提供、台湾人の観光や進学をどんどん受け入れ、その一方で台湾向けにミサイル演習して脅したり、反国家分裂法を制定し、武力行使を正当化したり、硬軟両様で台湾の独立を阻止し、統一工作を推し進めてきた。その結果、台湾の街には中国人観光客が溢れ、中国企業の看板も立つようになり、表向きは、中台は一体化しつつあるようにもなった。

しかし皮肉なことに、中台関係が緊密化すればするほど、台湾の嫌中意識が広がり、台湾は台湾、中国ではないという思いが強まっていることだ。中台交流の緊密化こそが、台湾の独立意識を拡大させており、少なくとも統一を嫌う現状維持派を増やしている。その一つの象徴が立法院を占拠した昨春の太陽花（ヒマワリ）学生運動であり、その背景には中国に対する反発がある。

最近の新台湾国策智库の世論調査（11月18日発表）でもその傾向が明白。自分を台湾人だという人は87%で、自分を中国人だという人は僅かに6%に過ぎない。この傾向は若い人ほど顕著で20～29歳は実に98%が自分は台湾人だと言っている。台湾の将来は独立した一つの国家だという人は61%なのに対し、中国と統一というのは12%。20歳代だと、独立した国家は81%、統一は9%だけ。若い世代に独立志向が強いということは今後、ますます台湾は独立意識が強くなっていくことを予見している。

傾中路線が独立意識を拡大

こうなると、中国のこれまでの統一工作は一体、どこまで奏功したのか、と疑問になる。馬英九の傾中政策は「究極統一」を目指しながらも、結果的には台湾の独立志向をかえっ

て強めてしまった。馬習会はこうした台湾人の意識変化をなんとか元に戻そうとするために開いた。といって「一つの中国」の合意を文書化し、調印締結などすれば、台湾人の反発は必至で、暴動さえ起きかねない。そこで馬習会は単なる口頭の合意というソフトな形で心理的圧力を掛けようという狙いで習近平が打った窮余の一策だろう。

だが、台湾は独立主権国家だという台湾人の意識はもう後戻りできないぐらいに固い。それだけに習近平にすれば、統一は見果てぬ夢だ。といって統一は国是。台湾の独立は絶対に認めるわけにはいかない。現状維持できれば上々。あらゆる手立てを講じて独立に向かわないようにするだろう。それでも台湾が例えば憲法改正して国名を台湾に変更するなどさらに一步、独立に向かえば、習近平としては断固として阻止する手段、つまりは反国家分裂法を根拠に武力行使に踏み切るかどうかの判断を迫られる。

反国家分裂法では国家分裂を図るものは武力で鎮圧するとしている。法そのものは中国の国内法だから、「外国」に適用されないが、中国は台湾派中国の一部と主張しているから、法に基づいて武力行使、つまり台湾進攻できると考えている。まさかと思うが、台湾の独立を認めれば共産党政権存亡の危機だ。台湾に続いて新疆ウイグル自治区、チベット、さらには内蒙古などが独立に向かうことは必定。習近平としてはなんとしても台湾の独立は防ぎたい。世界を敵に回しても台湾に武力行使するか？

馬習会は台湾海峡の平和を象徴する歴史的会談ではあったが、それで会談後も平和な中台関係が続くことを保証したわけではない。底流には独立、統一の二つの流れが激しく流れており、どちらか一方の流れが強くなれば、台湾海峡の平和は一気に崩れることを覚悟しておかねばなるまい。（敬称略 ジャーナリスト・迫田勝敏）